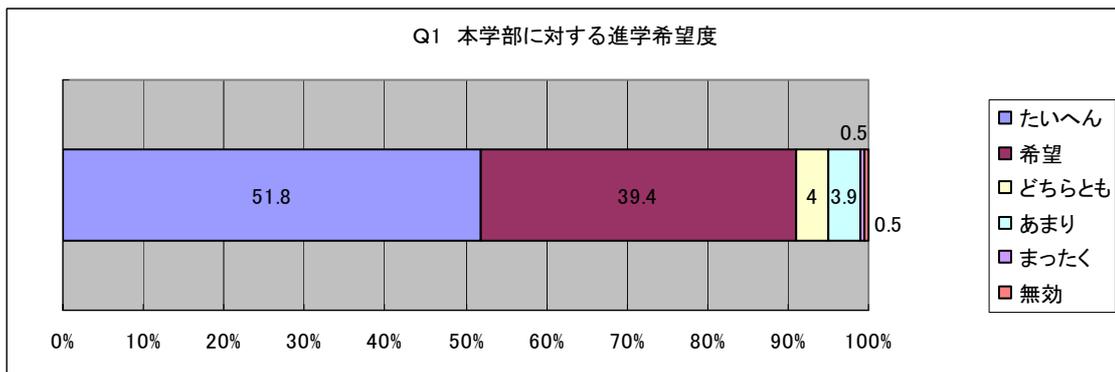


II 卒業生アンケート

1 単純集計分析

Q1 本学部に対する進学希望度

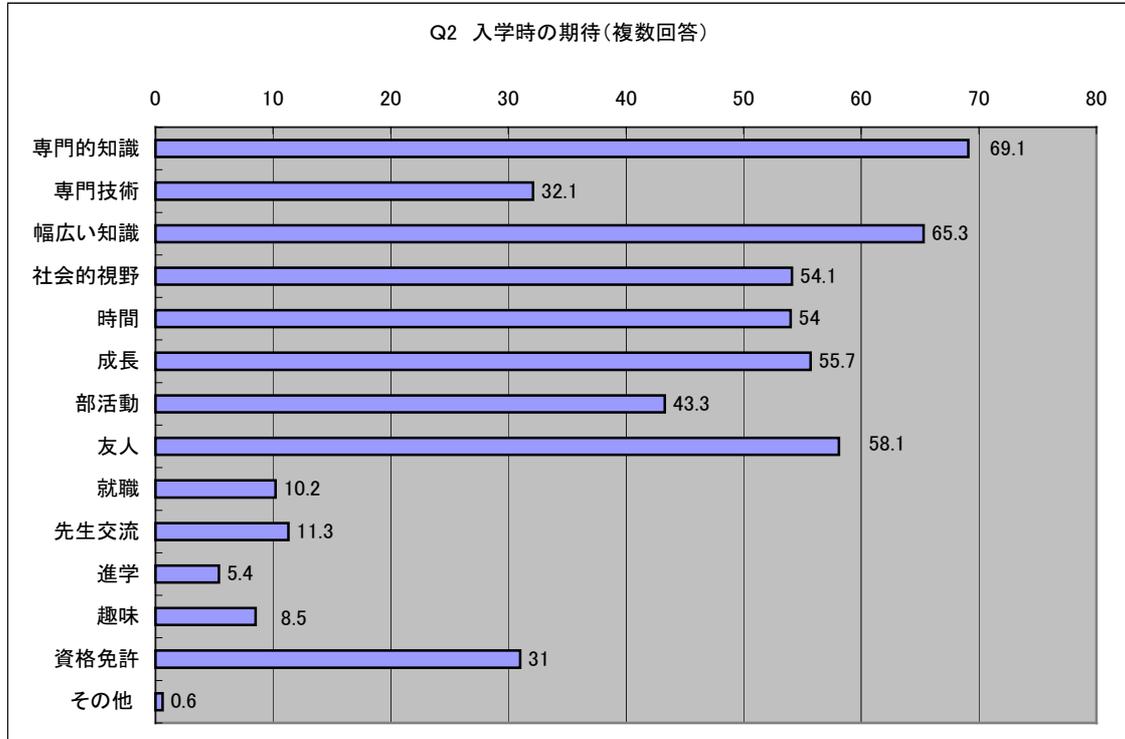
「発達科学部に入学する時、本学部への進学をどの程度希望していましたか。」



選択肢は、「たいへん希望していた」「希望していた」「どちらともいえない」「あまり希望していなかった」「まったく希望していなかった」の5つである。現在置かれている本人の状況によって回答が影響を受けていることを考慮に入れなければならないが、半数が「たいへん希望していた」であり、「希望していた」を加えると約9割となり、ほとんどの学生が希望にそった入学であったといえる。入学年度、学科による差異は認められなかった。

Q2 入学時の期待

「発達科学部に入学した時、本学部での学習や学生生活にどのようなことを期待していましたか。」



13の選択肢のうち、半数を越える者が選択している項目は、高い順に「専門的な知識を得ること」「幅広い知識・教養を得ること」「友人を得ること」「人間的に成長すること」「将来について考える時間や契機を得ること」「社会的視野や経験を広げること」であった。

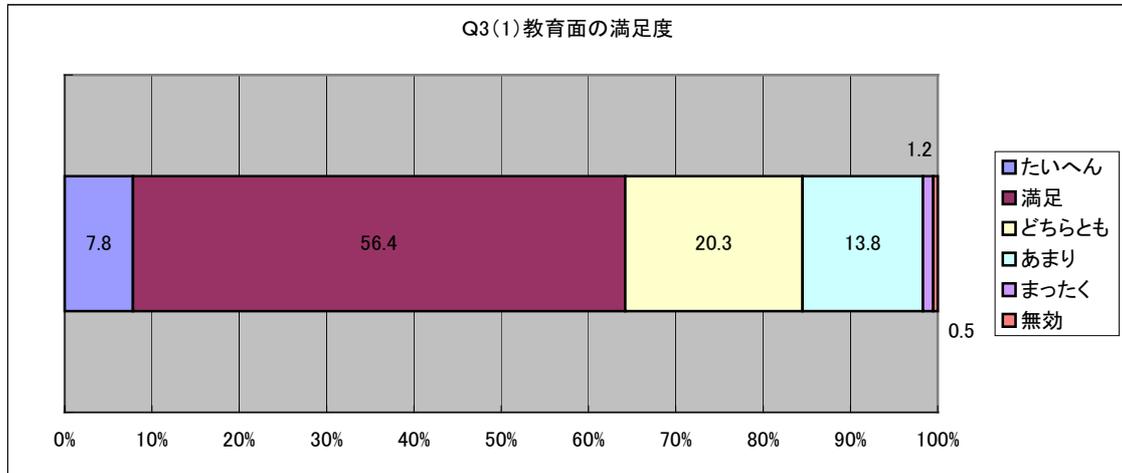
この結果についても、現在置かれている本人の状況によって回答が影響を受けていることを考慮に入れなければならないが、「資格・免許を取得すること」「専門的な技術・技能を獲得すること」がともに約3割という結果などをあわせて考えると、かつて教育学部であった時の資格・免許取得志向や近年の学生の動向として一般的に資格・免許が高いといわれている状況とは学生の志向が異なっている。

これは、教員採用の人数が極端に制限されていた時代状況の反映であるのか、学生が本学部を非教員養成系学部と意識した上で入学した結果であるのかは定かではない。なお、入学年度、学科による有意差は認められなかった。

Q3 本学部に対する満足度

(1) 教育面（講義、演習、ゼミ、研究など）の満足度

「本学部での授業や学生生活は満足のものでしたか。」

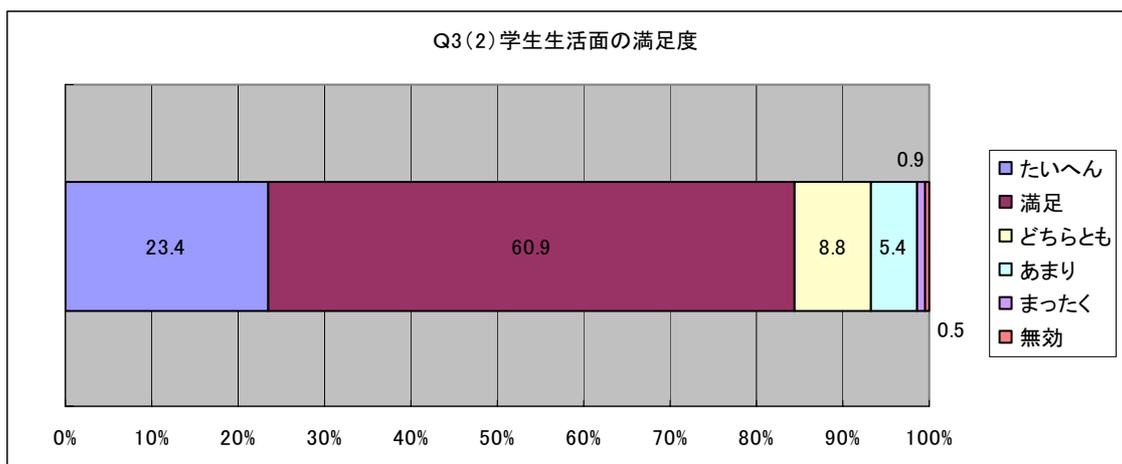


選択肢は「たいへん満足できた」「だいたい満足できた」「どちらともいえない」「あまり満足できなかった」「まったく満足できなかった」の5つである。

半数の者が「だいたい満足できた」と回答しているが、「たいへん満足できた」という者は1割以下である。また、「どちらともいえない」が約2割であり、これらを合わせると、学生にとって本学部の教育があまり満足のものとはなっていなかったようである。具体的な評価についてはQ4において言及する。また、入学年度、学科別の分析はテーマ別分析の項においてクロス集計に基づいた分析を行っている。

(2) 学生生活面の満足度

「本学部での授業や学生生活は満足のものでしたか。」



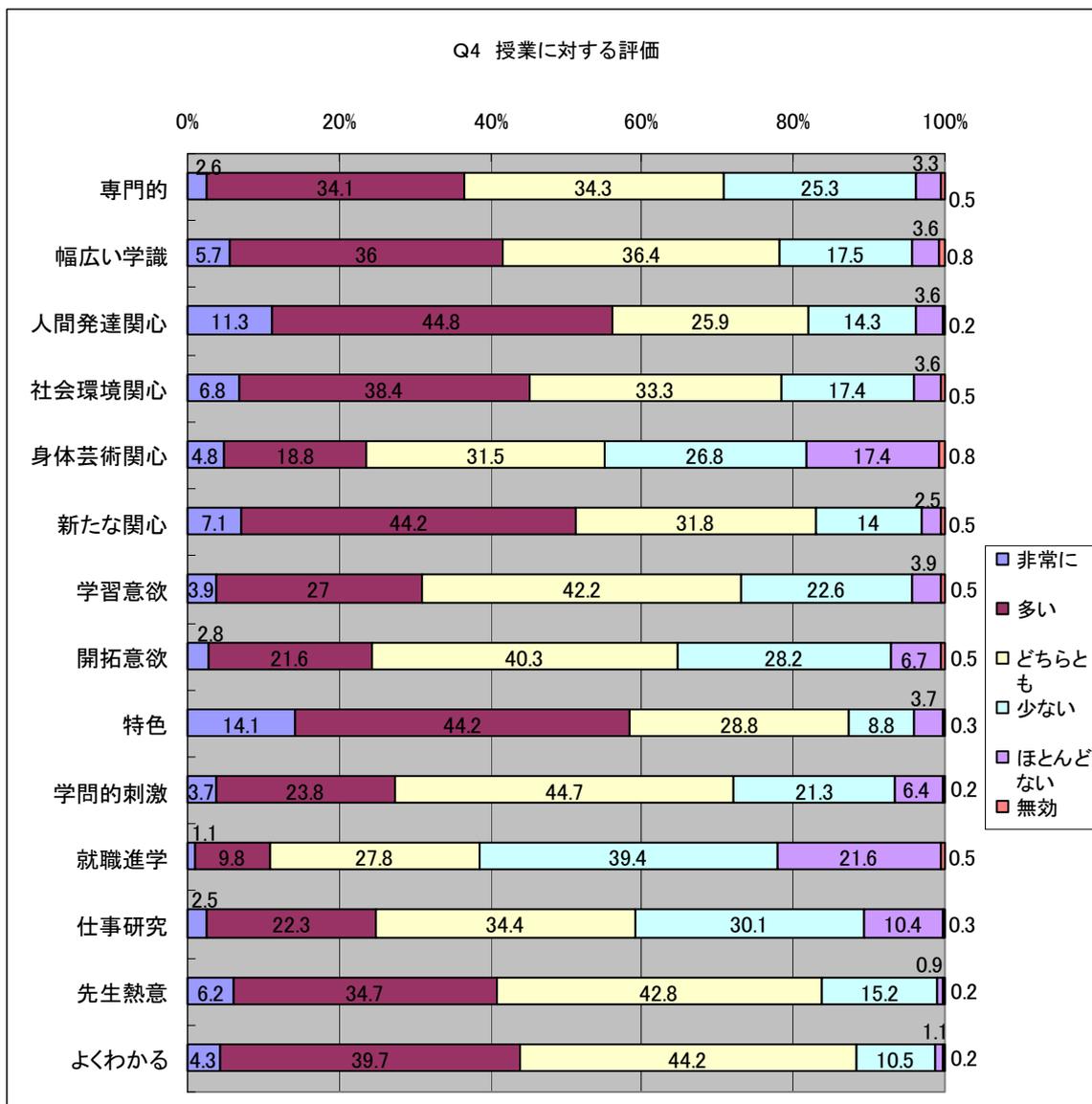
選択肢は「たいへん満足できた」「だいたい満足できた」「どちらともいえない」「あまり満足できなかった」「まったく満足できなかった」の5つである。

「教育面」とは傾向が明らかに異なり、「たいへん満足」が約2割、「だいたい満足でき

た」が約6割と満足度が高い。「どちらともいえない」が1割以下であり、学生の評価がはっきりとしていることが分かる。具体的な評価についてはQ5において言及する。また、入学年度、学科別の分析はテーマ別分析の項においてクロス集計に基づいた分析を行っている。

Q4 授業に対する評価

「本学部で受けた授業全般について、次のようなことに対してどのように思いますか。」



授業に関し14項目について、それぞれ「非常に多かった」「多かった」「どちらともいえない」「少なかった」「ほとんどなかった」の5つで評価を行うことを求めた。

各項目に対する評点（非常に多かった=1 ～ ほとんどなかった=5）の平均を算出したものが次表である。平均値が1に近いほどそうした授業が多かったと評価されていることになる。

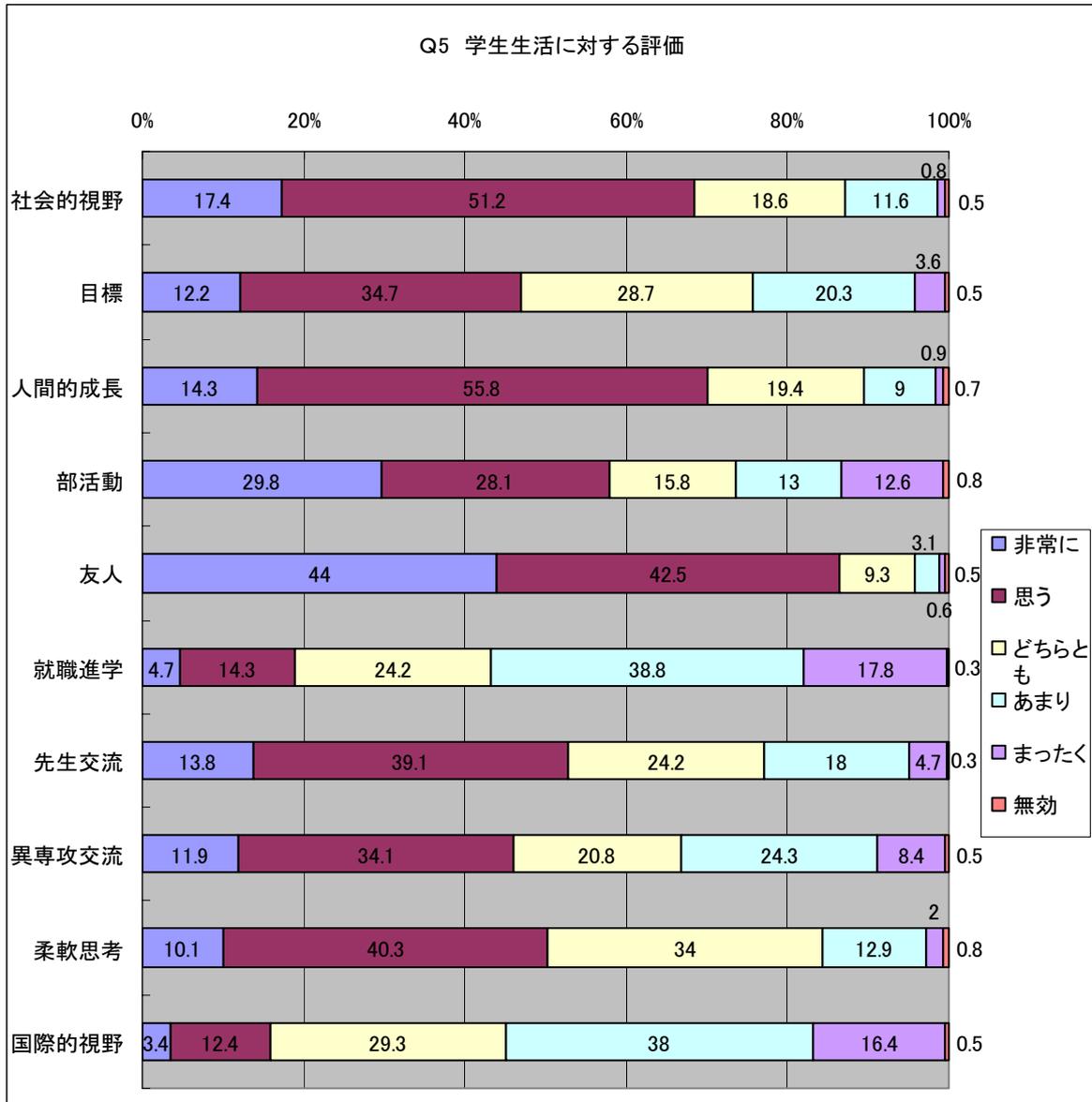
項目	平均値
(1) 専門的に深みのある授業	2.95
(2) 幅広い学際を感じることができる授業	2.82
(3) 人間・発達への興味・関心が深まる授業	2.55
(4) 社会・環境への興味・関心が深まる授業	2.75
(5) 身体・芸術への興味・関心が深まる授業	3.38
(6) 新たな興味・関心が喚起される授業	2.63
(7) 学習意欲が喚起される授業	2.98
(8) 新しい学問領域を開拓する意欲が喚起される授業	3.17
(9) 他学部にはない特色ある授業	2.46
(10) 他専攻の学生にも学問的刺激を与える授業	3.04
(11) 就職・進学に役立つ授業	3.73
(12) 仕事・研究に役立つ授業	3.25
(13) 先生の熱意が感じられる授業	2.71
(14) 内容がよくわかる授業	2.65

評価が高い項目は、「他学部にはない特色ある授業」「新たな興味・関心が喚起される授業」「内容がよくわかる授業」「先生の熱意が感じられる授業」などであり、低い項目は、「就職・進学に役立つ授業」「仕事・研究に役立つ授業」「新しい学問領域を開拓する意欲が喚起される授業」などであった。そこから浮かび上がってくる発達科学部の授業イメージは、内容がわかりやすく先生の熱意が感じられるが、その授業内容は、新たな学問領域を開拓する意欲に欠けており、就職や進学にあまり役立たないというものになる。

「人間・発達への興味・関心が深まる」「社会・環境への興味・関心が深まる」「身体・芸術への興味・関心が深まる」といった項目は、学科との関係も考慮に入れなければならぬため、**テーマ別分析**の項においてクロス集計に基づいた分析を行っている。なお、入学年度による有意差は認められなかった。

Q5 学生生活に対する評価

「本学部での学生生活について、次のようなことに対してどのように思いますか。」



授業に関し10項目について、それぞれ「非常に思う」「思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「まったく思わない」の5つで評価を行うことを求めた。

各設問に対する評点（非常に思う＝1 ～ まったく思わない＝5）の平均を算出したものが次表である。平均値が1に近いほどそうした学生生活を送ることができたと評価されていることになる。

項目	平均値
(1) 社会的視野を広げることができた	2.30
(2) 将来の目標を見つけることができた	2.71

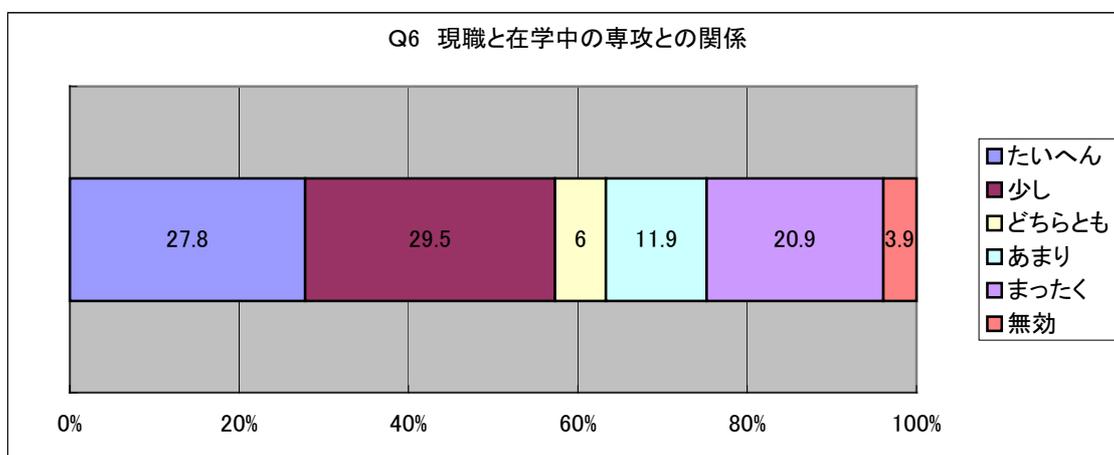
(3) 人間的に成長できた	2.30
(4) 充実した部・サークル活動（全学も含む）ができた	2.55
(5) よい友人を得られた	1.77
(6) 就職・進学に有益な情報や人脈を得ることができた	3.53
(7) 大学の先生との交流を深めることができた	2.62
(8) 専攻の異なる人と交流する機会があった	2.86
(9) 柔軟な考え方ができるようになった	2.61
(10) 国際的な視野を持つようになった	3.54

Q3 (2) によれば、学生生活全般に対する満足度は高かったが、「よい友人を得られた」が 1.77 と非常に高いだけでなく、「人間的に成長できた」や「社会的視野を広げることができた」の項目についても 2.30 と高く評価されている。これらの項目は、入学時において期待していたこと（Q2 参照）でも半数の者があげていた項目であり、期待が叶えられたと言えるであろう。

しかし、ここでも「就職・進学に有益な情報や人脈を得ることができた」は 3.53 と低く、本学部での学習・生活ともに就職には直接役立っているという評価はなされていないことがわかる。なお、入学年度、専攻学科による有意差は認められなかった。

Q6 現職と在学中の専攻との関係

「本学部で専攻した内容と現在の仕事や研究はどの程度関係があると考えますか。」

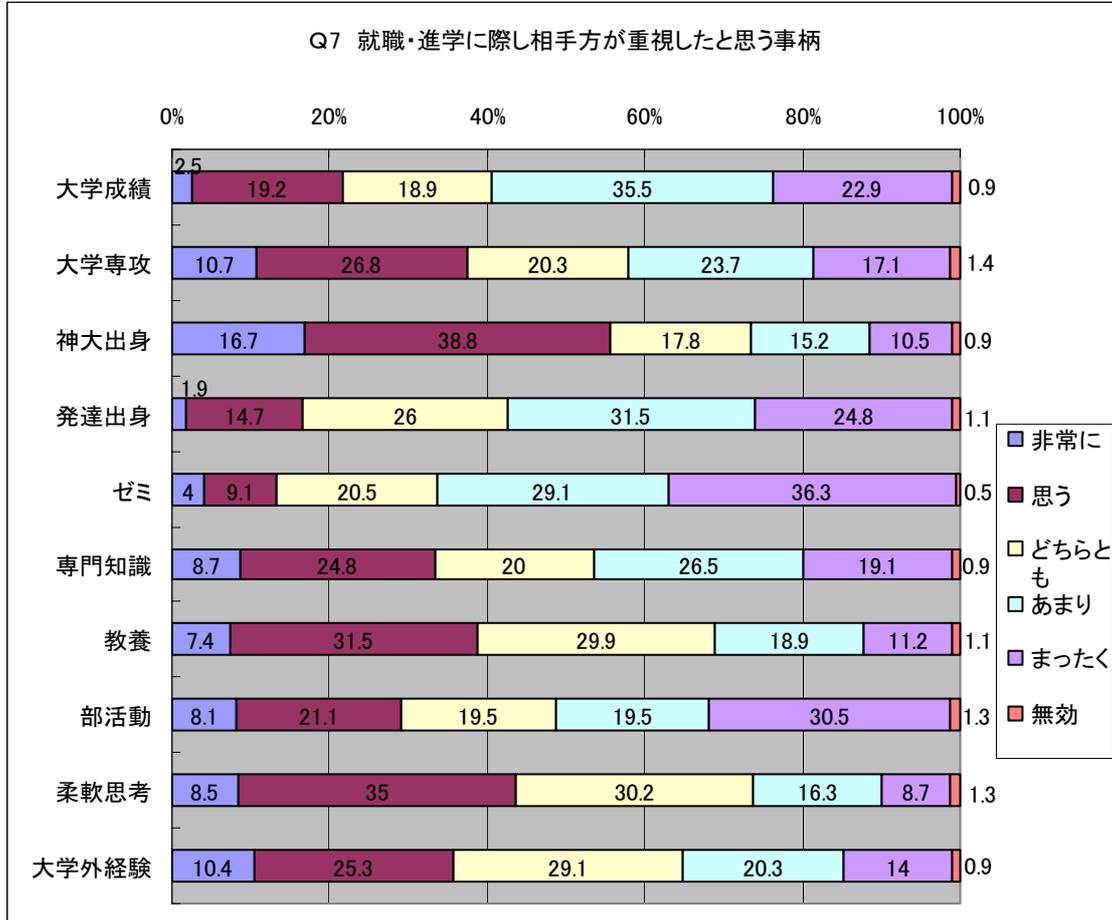


選択肢は、「たいへん関係がある」「少し関係がある」「どちらともいえない」「あまり関係ない」「まったく関係ない」の5つである。

半数の者が現職と専攻が関係があるとしている。これについては、Q14 (2) の現職の業種によって関係の内容が異なると考えられるのでテーマ別分析の項においてクロス集計に基づいた分析を行っている。なお、入学年度による有意差は認められなかった。

Q7 就職・進学に際し相手方が重視したと思う事柄

「本学部卒業後最初の就職や進学に際して、次のようなことを相手方はどの程度重視したと思いますか。」



10項目について、それぞれ「非常に思う」「思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「まったく思わない」の5つで評価を行うことを求めた。

各項目に対する評点（非常に思う＝1 ～ まったく思わない＝5）の平均を算出したものが次表である。平均値が1に近いほど就職や進学に際し、相手方が重視したと卒業生が思っていることになる。

項目	平均値
(1) 大学での成績	3.63
(2) 大学での専攻	3.18
(3) 神戸大学出身であること	2.70
(4) 発達科学部出身であること	3.69
(5) 所属したゼミ	3.90
(6) 大学で得た専門知識・技術	3.28
(7) 大学で得た知識や教養	3.01

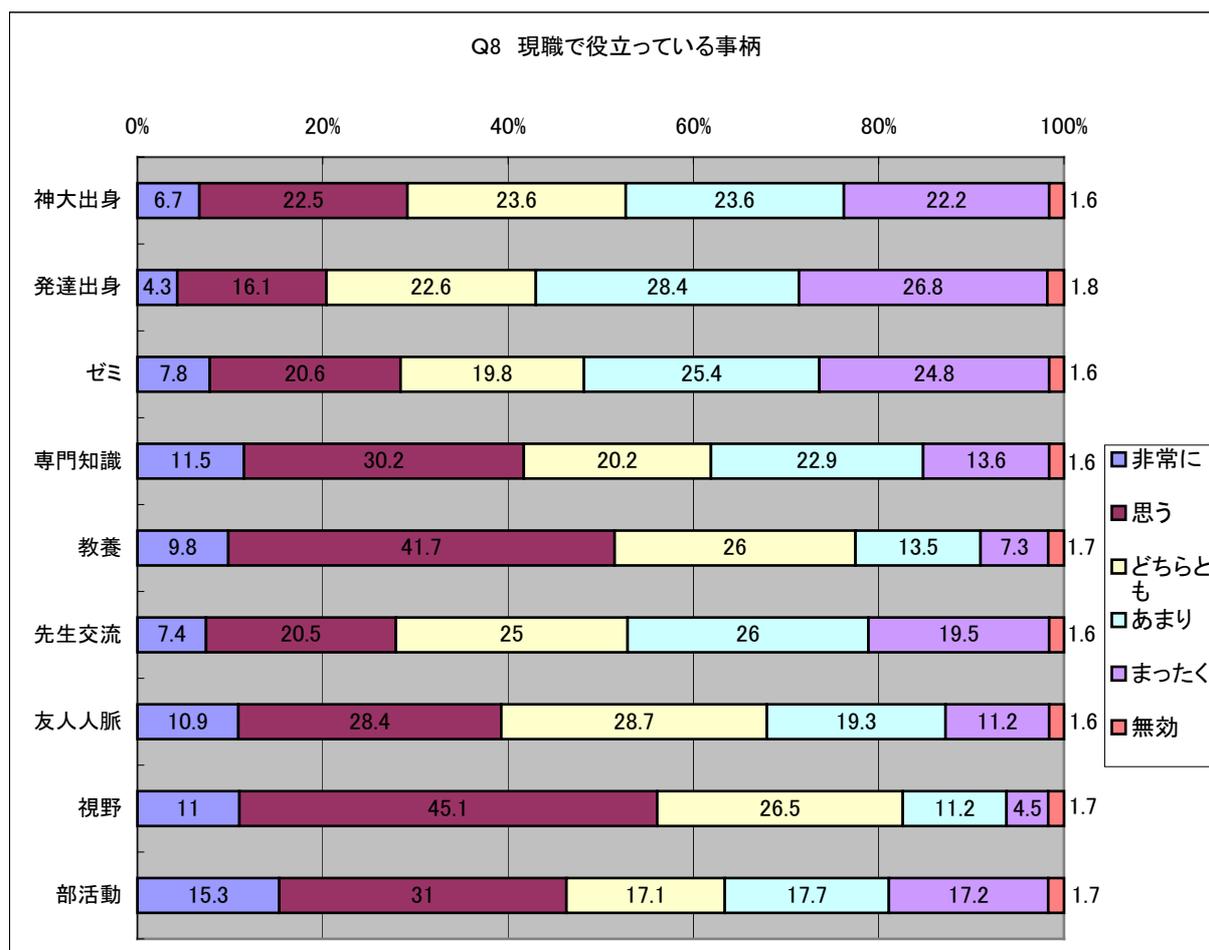
(8)部・サークル活動（全学も含む）での活動や人脈	3.51
(9)大学で培われた広い視野や柔軟な考え方	2.89
(10)大学以外での学習経験	3.08

もっとも高いのは、「神戸大学出身であること」である。神戸大学の名が就職に際し、一定の有効性をもっていることがうかがえる。しかし、「発達科学部出身であること」はあまり重視されなかったと思われるようであり、就職に際し学部としての地位を確立していると考えられていないようである。

また、「大学での成績」や「所属したゼミ」についてもあまり重視されたとされていないようであり、学部教育の成果をどのように考えるべきかの問題を提起する結果となっている。

Q8 現職で役立っている事柄

「現在の仕事や研究を行う上で、次のようなことはどの程度役立っていると思いますか。」



9項目について、それぞれ「非常に思う」「思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「まったく思わない」の5つで評価を行うことを求めた。

各項目に対する評点（非常に思う＝1 ～ まったく思わない＝5）の平均を算出したものが次表である。平均値が1に近いほど仕事や研究を行う上で役立っていると卒業生が思っていることになる。

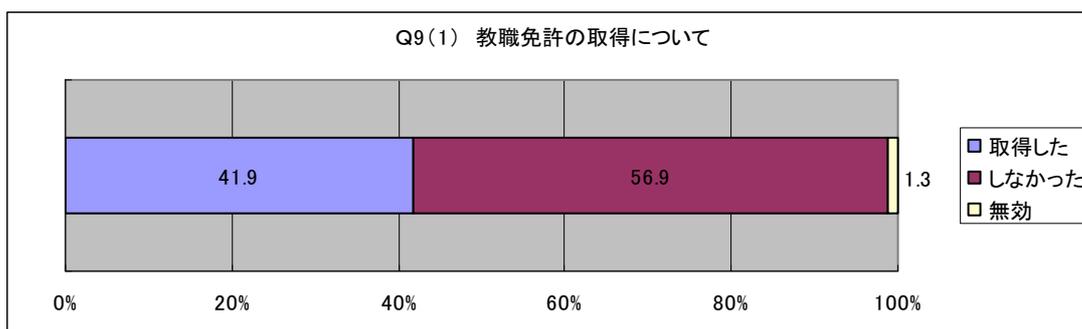
項目	平均値
(1)神戸大学出身であること	3.41
(2)発達科学部出身であること	3.67
(3)所属したゼミ	3.48
(4)大学で得た専門知識・技術	3.06
(5)大学で得た知識や教養	2.77
(6)大学の先生との交流	3.39
(7)大学で得た友人や人脈	3.01
(8)大学で培われた広い視野や柔軟な考え方	2.63
(9)部・サークル活動（全学も含む）で培われたもの	3.01

「大学で培われた広い視野や柔軟な考え方」がもっとも高い。これは、**Q7**における同一の項目が高いことと関連していると考えられる。

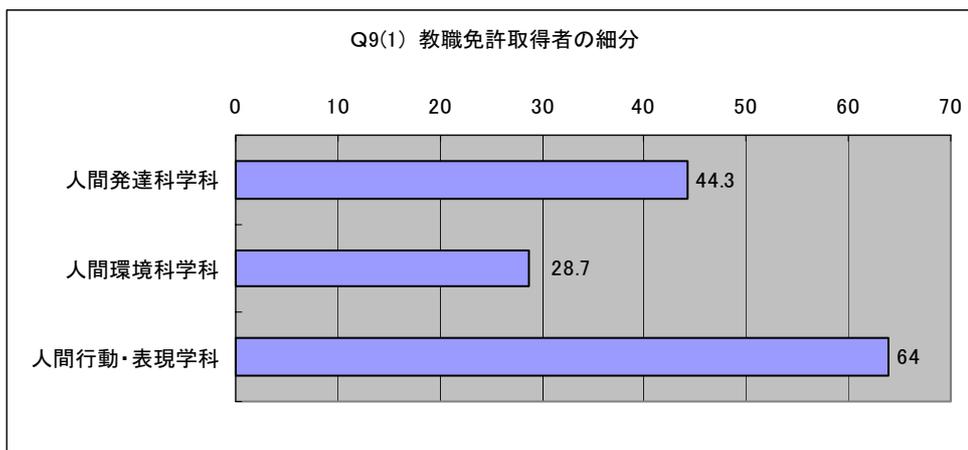
Q7の項目と一致する項目の平均値を比較してみると、値が上昇している項目は「所属したゼミ」(0.42)、「大学で培われた広い視野や柔軟な考え方」(0.26)、「大学で得た知識や教養」(0.24)、「大学で得た専門知識・技術」(0.22)であった。逆に、下がっているのは「神戸大学出身であること」であり、0.71ポイント降下している。この結果については、個々の卒業生の現職との関係、個人内比較を行う必要があるが、全体として就職後は大学教育や生活で得たことが役立っていると考えられていると言える。

Q9 教職免許の取得について

「本学部在学中、教職免許を取得しましたか。」

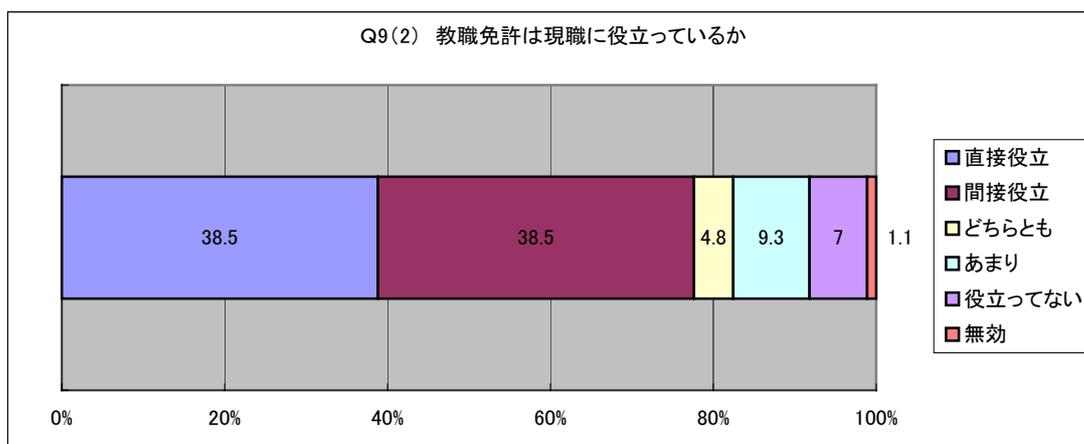


(教職免許を取得した者を母数とする)



Q2において「資格・免許を取得すること」を入学時に期待していた学生が約3割であったのに対して、実際に教職免許を取得した学生は約4割であった。

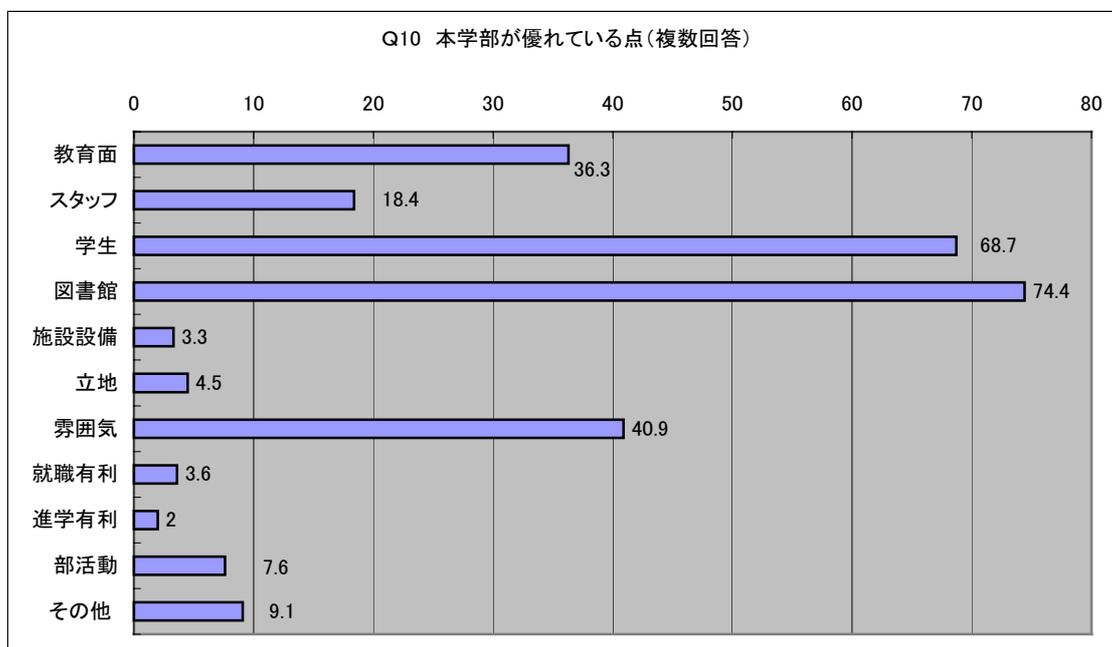
「教職免許やそこで学習したことは、現在の仕事や生活において役に立っていると思いますか。」(教職免許を取得した者を母数とする)



教職免許を取得した学生は、約4割が「直接的に役立っている」、約4割は「間接的に役立っている」と回答している。これについては現職との関係についても考慮する必要があるので、テーマ別分析の項においてクロス集計に基づいた分析を行っている。

Q10 本学部の優れている点

「発達科学部が他大学や他学部 비해、優れていると思うところはどこですか。」

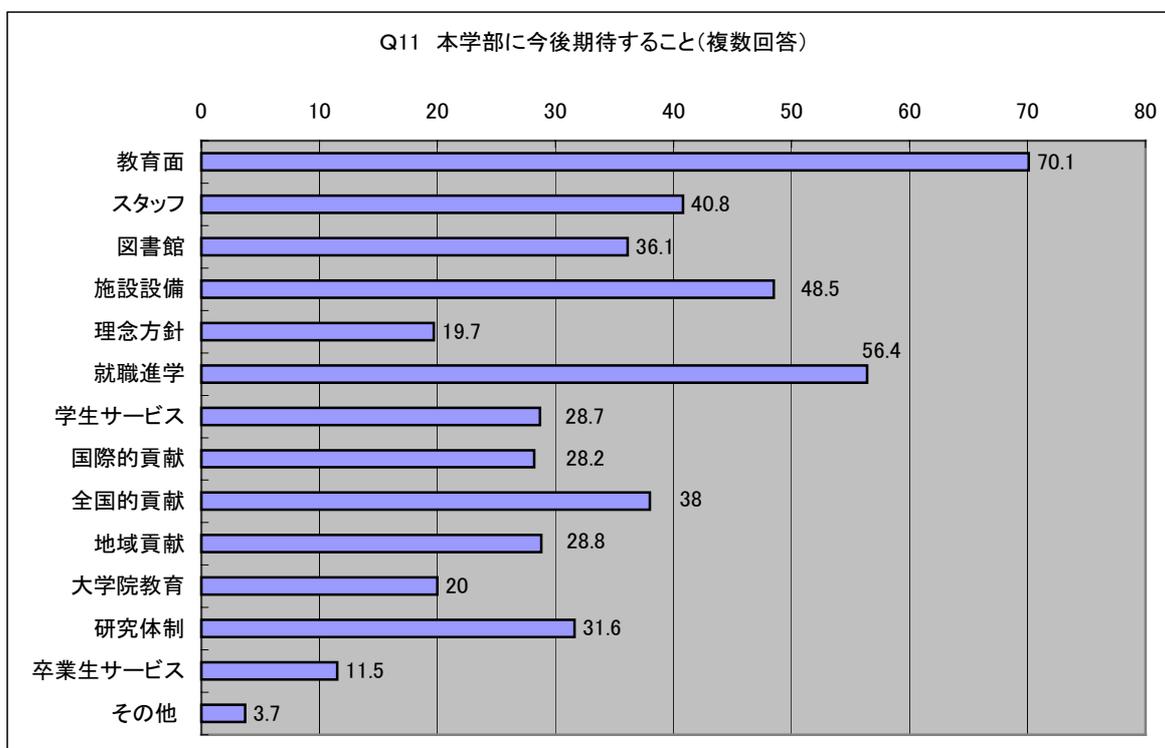


「図書館」という回答がもっとも多く7割を超えている。蔵書数一つとっても、発達科学部の図書館が他学部の図書館や他大学の図書館に比較して決して優れているとは言えないのに、なぜ多くの回答者の支持を集めたのかは興味深い点である。

「学生」も約7割と高い。これは、**Q5**や**Q8**において「よい友人を得た」との回答が高いことと一致する。このような「学生」仲間が**Q3 (2)**の回答結果に示されているように、学生生活を満足度の高いものにした一因であると考えられる。

Q11 本学部に今後期待すること

「発達科学部の今後に期待することは何ですか。」

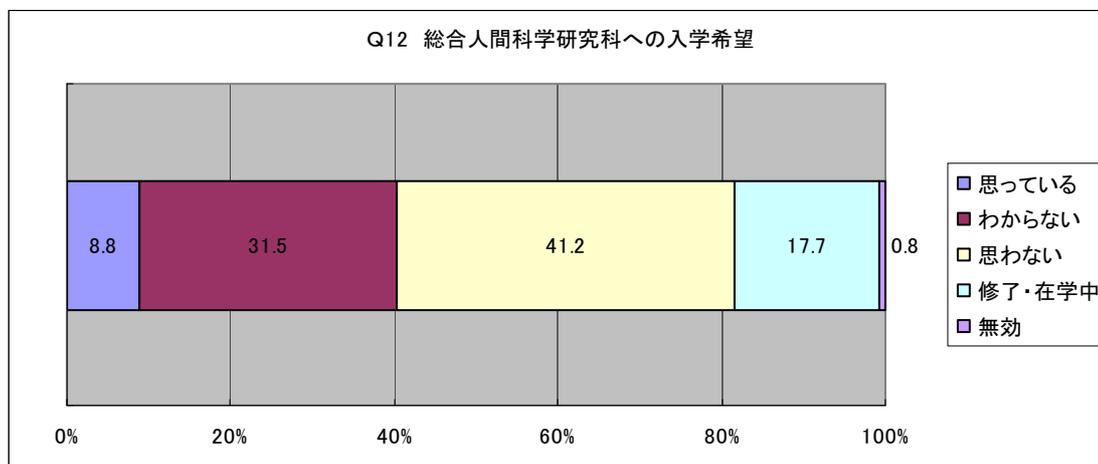


今後期待することでは、「教育面（講義、演習、ゼミ、研究など）の改善・充実」がもっとも高く、ついで、「就職・進学への取り組み姿勢」である。

「教育面（講義、演習、ゼミ、研究など）の改善・充実」についての満足度は、**Q3 (1)** および**Q4**の回答結果からみても高いとは言えないことから、今後への期待として挙げられていることは当然の帰結であろう。また、「就職・進学への取り組み姿勢」については、**Q4**や**Q7**において言及したように、卒業生からの評価は高いとは言い難い。今後改善・充実が期待されるゆえんである。

Q12 総合人間科学研究科への入学希望

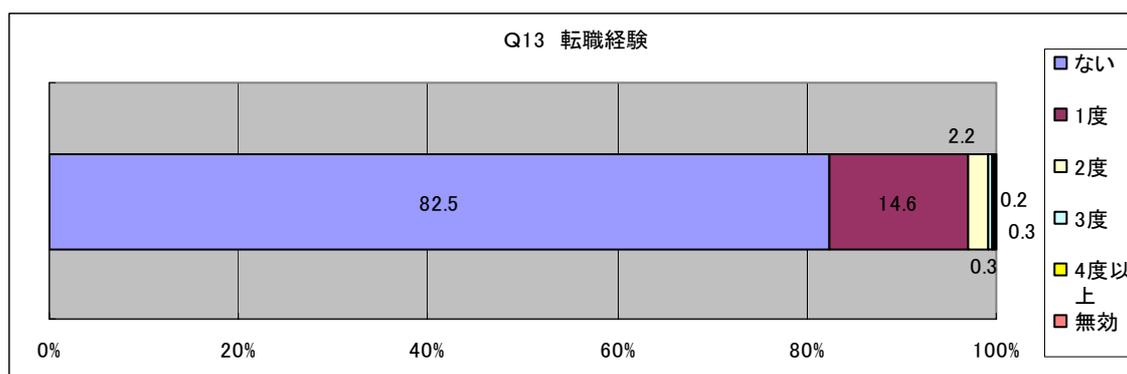
「現在あるいは将来において、総合人間科学研究科（大学院）で学習や研究をしたいと考えますか。」



「修了・在学中」が約 2 割、「思っている」者が約 1 割であり、卒業生のニーズは約 3 割というところである。発達科学部だけでなく、総合人間科学研究科も多様な専攻から構成されている研究科であるため専攻にもよるであろうが、総合人間科学研究科への進学が就職や大学院後期課程への進学に有利となっているか、その点について総合人間科学研究科における調査が必要であろう。

Q13 転職経験

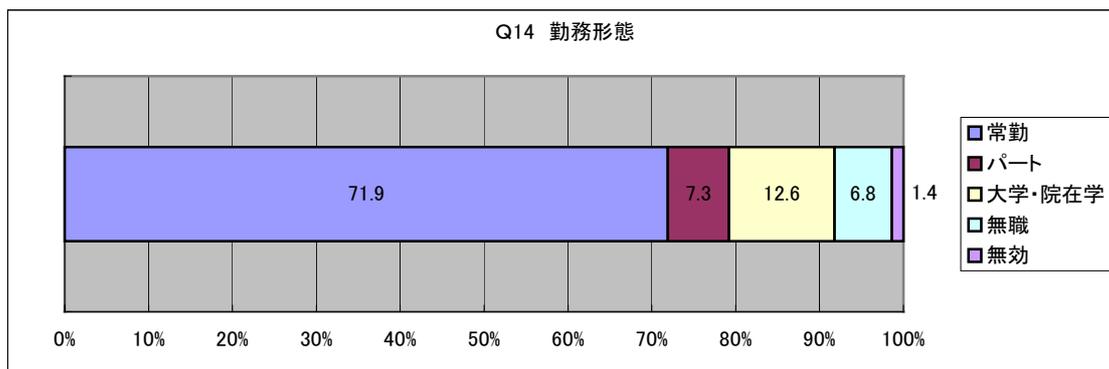
「本学部を卒業後これまでに転職の経験をお持ちですか。」



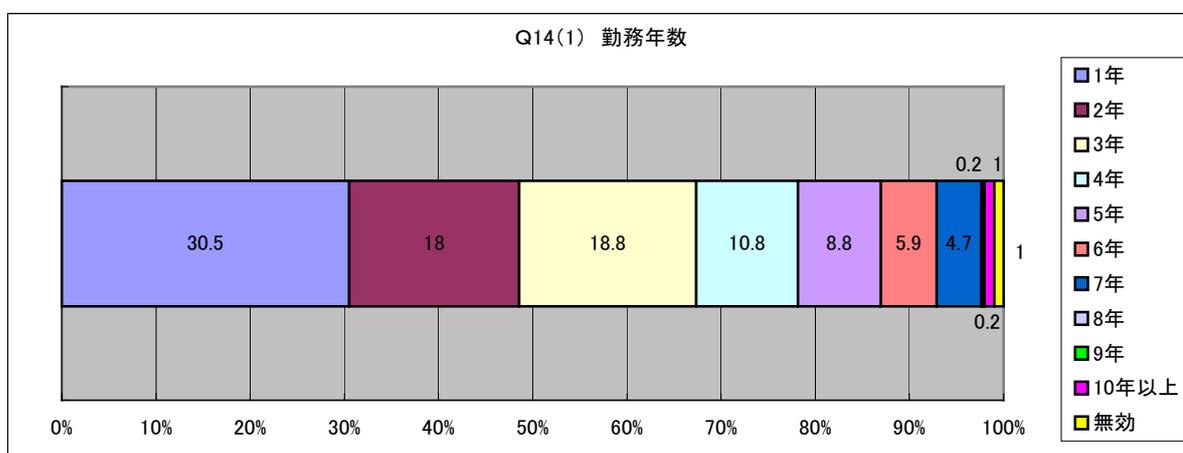
Q14 現職

現職について次のような角度からいくつか質問を行った。とくに分析は行わないが、卒業生の職業に係わる一面がみえると思われる。

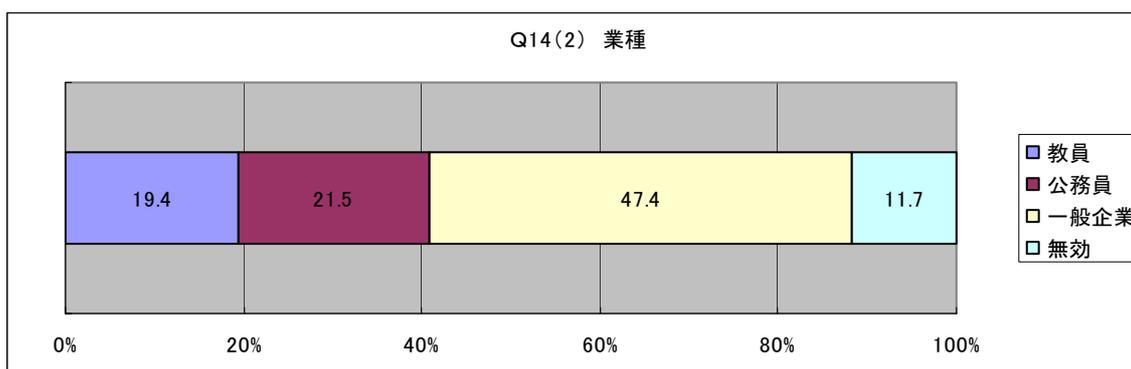
「現在の仕事についてお聞きします。現在何かお仕事をしていますか。」



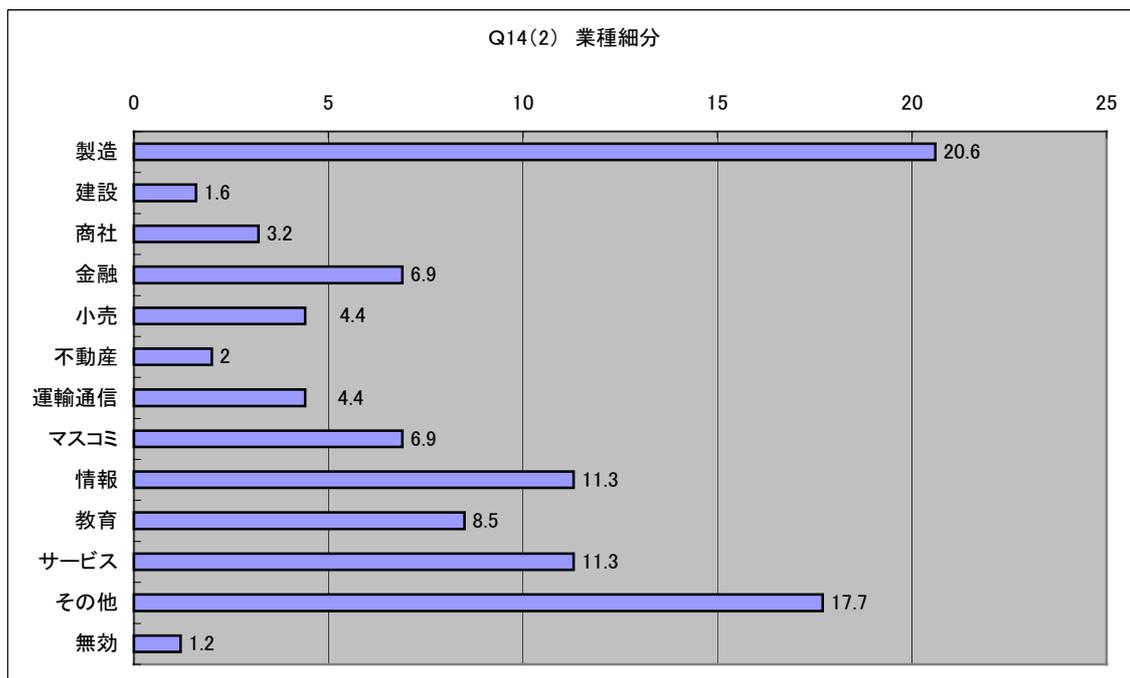
「現在の仕事に就かれて何年ですか。」（「常勤」「パート」と回答した者を母数）



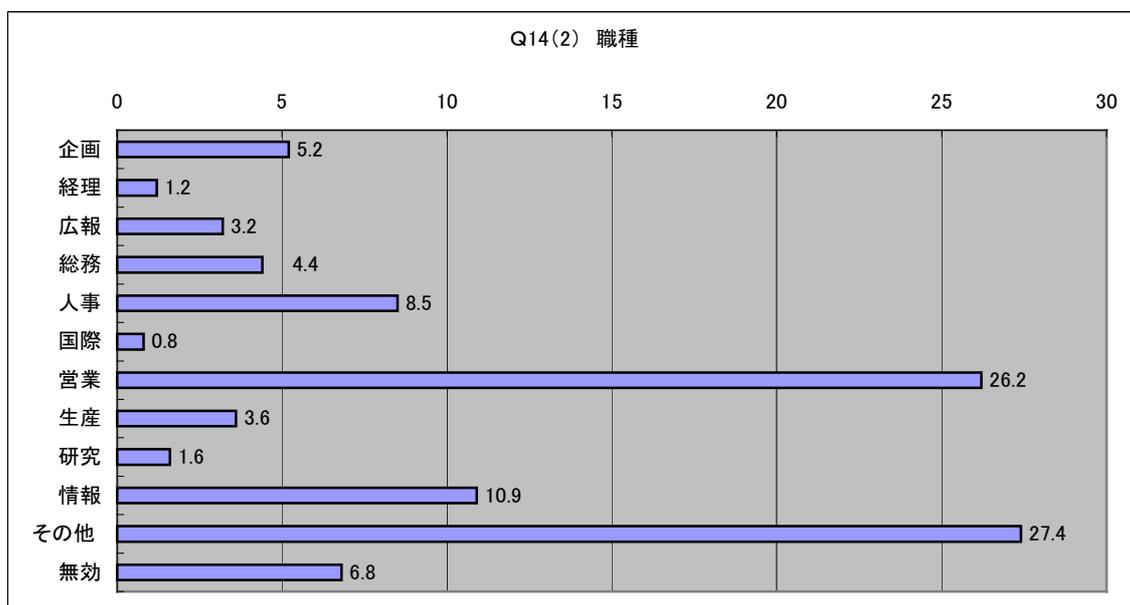
「現在の仕事は主にどのような業種ですか。」（「常勤」「パート」と回答した者を母数）



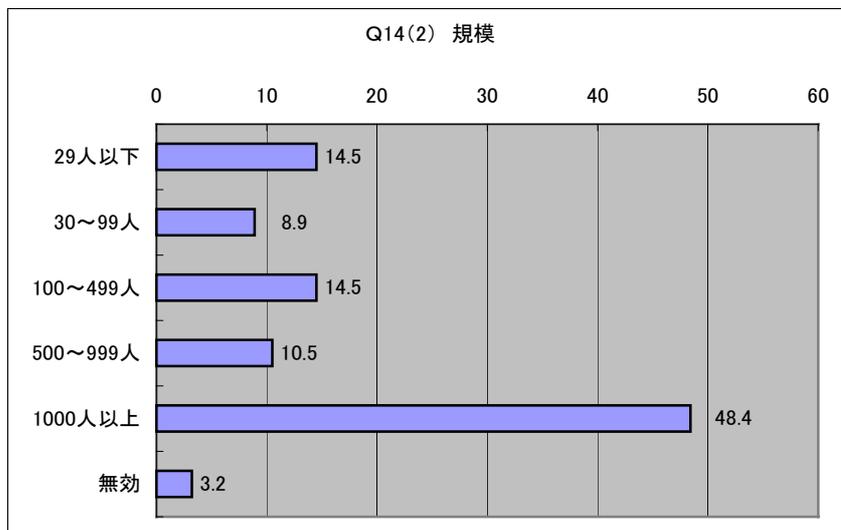
(「一般企業・自営」と回答した者を母数)



「現在の主な職種は何ですか。」(「一般企業・自営」と回答した者を母数)



「現在の会社の規模はどれですか。」（「一般企業・自営」と回答した者を母数）



2 テーマ別分析（クロス集計）

(1) 本学部への進学希望度と本学部に対する満足度との関係（Q1×Q3）

本学部への進学希望度のグループ間平均値をとると、次のようになる。教育面では、平均に有意差は認められないが、学生生活面では有意差が認められる。

①教育面

Q1 選択肢	たいへん	希 望	どちらとも	あまり	まったく
平均値	2.3474	2.5020	2.7692	2.7200	3.0000

$p < .013$

②学生生活面

Q1 選択肢	たいへん	希 望	どちらとも	あまり	まったく
平均値	1.8852	2.0553	2.2692	2.3200	2.6667

$p < .005$

(2) 学科と授業評価との関係

Q4の項目のなかで、専攻学科によって平均値に有意差が認められたものは次の項目であった。

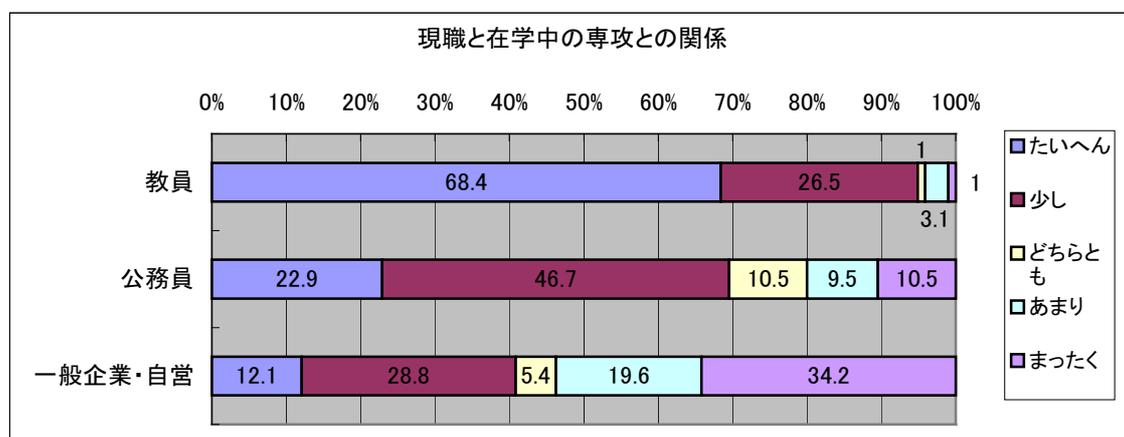
項 目	人間発達 科学科	人間環境 科学科	人間行動・ 表現学科
(1) 専門的に深みのある授業	2.8013	3.2168	2.8291
(2) 幅広い学際を感じることができる授業	2.9901	2.5487	2.8974
(3) 人間・発達への興味・関心が 深まる授業	2.1589	2.9867	2.7094
(4) 社会・環境への興味・関心が 深まる授業	2.8907	2.3186	3.2222
(5) 身体・芸術への興味・関心が 深まる授業	3.4272	3.9690	2.1111
(14) 内容がよくわかる授業	2.5132	2.7743	2.7778

$p \leq .001$

(3) 現職との関係

①現職と在学中の専攻との関係

現職をQ14によって「教員」「公務員」「一般企業・自営」に分け、現職と大学での専攻との関係について分析したものが次のグラフである。



当然のことではあるが、「教員」においては「たいへん関係ある」が約7割である。しかし、その一方で「一般企業・自営」では「まったく関係ない」が3割以上である。「あまり関係ない」を合わせると5割を超えていることになり、大学での専攻との関係の低さがはっきりと現れている。「公務員」については、「たいへん関係がある」と「少し関係がある」を合わせると7割近くとなり、学部における専攻と何らかの関係があると考えられていることが特徴である。

②役立っていることと現職との関係

現職をQ14によって「教員」「公務員」「一般企業・自営」に分け、Q8における現在の仕事や研究に役立っている程度の分析を行った。ほとんどの項目で「一般企業・自営」の平均値が3グループ中もっとも低くなった。平均値で有意差が認められたのは、次の項目である。この結果から「一般企業・自営」の卒業生の多くは、本学部における学習・経験が現職に十分に役立っているとは感じていないと言えるであろう。

項目	教員	公務員	一般企業・自営
(2) 発達科学部出身であること	3.2755	3.3714	3.9042
(3) 所属したゼミ	3.3030	3.2667	3.7458
(6) 大学の先生との交流	3.1429	3.0762	3.6083
(7) 大学で得た友人や人脈	2.6701	2.6762	3.0958

$p \leq .001$

③就職時に重視された項目と現在役立っている項目の相違

次の表は、現職をQ14にそって「教員」「公務員」「一般企業・自営」に分け、Q7とQ8において一致する項目について、各個人のQ7の値からQ8の値を減算したものの平均

値である。

これによると、「神戸大学出身であること」はすべての業種で一旦就職してしまうと役立っているという実感が減少しているといえる。しかし、その他の項目については、かなり傾向が異なる。

「教員」や「公務員」では、就職後には「所属したゼミ」が役立っているという評価が高くなる。「一般企業・自営」と比較すると「神戸大学出身であること」の低下も小さい。これは、就職に際して教員や公務員は教員採用試験や公務員採用試験という形態を取るため、個別の出身大学・学部が直接的に関係することがないためであると考えられる。一方、「一般企業・自営」では、就職後大きく低下している項目が目立つ。

項 目	教 員	公務員	一般企業・自営
神戸大学出身であること	-.5200	-.3784	-.9597
発達科学部出身であること	.1200	.2342	-.0847
所属したゼミ	.8200	.4324	.2984
大学で得た専門知識・技術	.3900	.0721	.1734
大学で得た知識や教養	.4000	.2072	.2298
大学で培われた広い視野や柔軟な考え方	.2323	.0180	-.3629

(4) 現職と教職免許との関係

①教職免許取得率

次の表は、現職を **Q14** によって「教員」「公務員」「一般企業・自営」に分け、**Q9** とクロス分析したものである。

業 種	教 員	公務員	一般企業・自営
取得率	98.0	32.4	29.4

②教職免許の有益さ

次の表は、現職を **Q14** によって「教員」「公務員」「一般企業・自営」に分け、**Q7** で「教職免許を取得したもの」が教職免許やそこで学習したことが現在の仕事や生活で役に立っているか否かの平均値を比較したものである。

業 種	教 員	公務員	一般企業・自営
平均値	1.1237	2.5000	2.9167

$p < .001$

「教員」において「役立っている」という評価は当然のことであるが、「公務員」や「一般企業・自営」におけるこの数値を高いと見るか、低いと見るかは判断の分かれるところであろう。発達科学部における教員養成課程の位置づけを判断するには、免許取得者で教職についていないこれらの卒業生についても、免許取得の目的、さらには、役に立っている

ると評価するポイントについてのさらなる調査が必要であろう。

(5) 現職と本学部の今後への期待との関係

次の表は、現職を**Q14**によって「教員」「公務員」「一般企業・自営」に分け、**Q11**の本学部に今後期待する項目を比較し、業種によって有意差が認められた項目である。本学部出身で「公務員」に就いている卒業生は、地方公務員が多いこともあり、「地域・地元での活躍・貢献」を期待するのである。また、「一般企業・自営」では、就職先が「1000人以上」の大企業が約5割であることから、「地域・地元での活躍・貢献」よりも「国際的分野での活躍・貢献」が望まれるのであろう。

項 目	教 員	公務員	一般企業・自営
⑧国際的分野での活躍・貢献	17.0	18.0	36.7
⑩地域・地元での活躍・貢献	13.0	40.5	28.6

p<.001

(6) 現職と総合人間科学研究科への進学希望との関係

次の表は、現職を**Q14**によって「教員」「公務員」「一般企業・自営」に分け、**Q12**の総合人間科学研究科への進学希望率とクロス集計したものである。

これによれば、「教員」がもっとも希望が高く、「修了・在学」と「進学希望」を合わせると約3割となる。しかし、「一般企業・自営」では、合わせても15パーセント程度であり、「教員」の半数である。

現在、大学院志向が高まっていると言われるが、発達科学部において、これらの数値をどう読むのか、総合人間科学研究科の教育目的の見直しも含めて考える必要があると言えよう。

	教 員	公務員	一般企業・自営
進学希望	18.2	7.4	6.9
修了・在学	14.1	17.6	8.5

p<.001